行　政　視　察　報　告　書		
経済地域委員会 行政視察		平成３０年７月２５日（水）～７月２７日（金）
視 察 先 及び 調査事項	唐津市	九州オルレ唐津コースについて
	九州観光推進機構	九州オルレ推進事業について
	屋久島町	屋久島の自然環境を活かした観光振興の取組みについて
	屋久島環境文化財団	屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について

１、視察の目的

（１）視察項目　「山岳高原を活かした観光について」

（２）本市における課題

ア、環境保全と山岳資源利用
イ、登山道、遊歩道の整備
ウ、施設の維持管理方法
エ、入り込み客数の減少傾向
オ、上高地等への２次交通（手段、看板）
カ、山岳での遭難防止対策や医療体制
キ、法律、規制による調整や許可等

（３）視察の必要性

本市は、山岳・教育（学）・音楽の「三つのガク都」として発展している。その一つの岳都として、北アルプス連峰や美ヶ原高原等の豊かな恵みと美しい自然環境があるが、様々な課題を抱えている。

例えば、国内の人口は、少子高齢化の動向を示し、近年の旅行形態は個人旅行のスタイルが定着している。上高地の入込客数も、平成１６年以降減少し、平成１５年には約１９２万人いた入込客数も、平成２９年には約１２２万人に減少傾向にある。

これらのような課題を解決し、本市の恵まれた自然環境を守り、そして活かす取り組みを先進地から学ぶ必要があると判断した。

２、視察内容

（１）　研修視察地　「唐津市」

ア、調査項目　「九州オルレ唐津コースについて」

イ、日時　平成３０年７月２５日（水）１５：２０～１７：１５

ウ、会場　唐津市役所鎮西市民センター（佐賀県唐津市鎮西町名護屋１５３０）

エ、内容

（ア）オルレとは

「オルレ」は韓国・済州島から始まったもので、もともとは済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」という意味である。自然豊かな済州島で、トレッキングする人が徐々に増え、「オルレ」はトレッキングコースの総称として呼ばれるようになり、今では韓国トレッキングの中心的コースになっている。オルレの魅力は、海岸や山などを五感で感じ、自分のペースでゆっくりとコースを楽しむところにある。

（イ）九州オルレとは

九州オルレは、済州オルレの姉妹版である。済州島と同じように九州には四季の美しい風景があり、トレッキングに適した山岳を五感で感じ九州の魅力を再発見してもらいたいと考え、九州オルレのコースを整備した。

（ウ）オルレの歩き方

コース内の要所には「カンセ」と呼ばれる済州島の馬をモチーフにしたオブジェや青と赤のリボン、木製の矢印やペイントされた矢印などの標識を設置している。スタートからフィニッシュ地点へ向かう場合は「青」、フィニッシュからスタート地点へ向かう場合は「赤」で示されている。

（エ）唐津コース

平成２５年１２月１５日に、九州観光推進機構から認定を受け、九州オルレ第３次コースとして唐津コースが開始された。唐津コースは武雄コースに次いで佐賀県内２番目のコースとなる。唐津コースの特徴は名護屋城跡を中心とした武将の陣跡や唐津焼の窯元などの桃山文化をたどる「歴史・文化」、波戸岬から眺める玄関灘の「風景」、サザエのつぼ焼きや一口アワビなどの「味覚」を楽しむことができる。歩く場所ごとに、また季節ごとに見せる風景に、新たな発見と感動が得られるコースでである。

オ、成果・所感等

（ア）オルレ利用者の宿泊率が低く、平成２９年度イベントアンケートによると、消費額単価も２，０６５円ということだった。本市で導入する際は、市内宿泊施設との連携はもとより、他にもコースを拡充することによって、宿泊率や消費額を上げる取り組みが必要である。

（イ）唐津コースの利用者は、平成２９年度で約２，７００人であり、そのうち

約１，０００人が外国人ということであり、外国人の内訳は、１００％が韓国人ということだった。本市でオルレを導入する場合は、立地においても、本市のこれまでの外国人旅行客のデータにおいても、韓国人をターゲットとして、利用者数を見込むのは難しいと言える。
（ウ）オルレ終了後は、ゴール地点からスタート地点への移動はバスを利用している。もしくは、ゴール地点に車を置き、バスでスタート地点へ移動してから、オルレを開始している。本市でオルレを導入した場合は、この移動手段が課題となる。

（２）研修視察地　「九州観光推進機構」

ア、調査項目　「九州オルレ推進事業について」
イ、日時　平成３０年７月２６日（木）１０：１５～１０：５５
ウ、会場　九州観光推進機構（福岡県福岡市中央区渡辺通２－１－８２　電気ビル共創館６階）
エ、内容
（ア）九州観光推進機構とは
九州観光推進機構は、九州地方知事会と九州経済連合会、九州商工会議所連合会、九州経済同友会、九州経営者協会から成る九州地域戦略会議で策定された「九州観光戦略」の実行組織として 2005 年４月に設立された。
「九州はひとつ」の理念のもと、九州の観光振興については、九州７県や会員企業・団体はもちろん、観光やまちづくりに関わる多くの方々と共に取り組んでいる。
九州観光を取り巻く環境はめまぐるしく変化し、海外からの観光客数増加に対応した体制などの課題も浮上している。そこで、2023 年度を目標年度として策定された「第二期九州観光戦略」において、最大限の効果を上げられるよう施策の重点化を図り、効果的な施策については一層強化するとともに、新たに生じたニーズに対しては積極的に対応していく。
また、2014 年４月に、一般社団法人となり、2018 年３月に観光庁から「日本版ＤＭＯ法人」として認定された。これに伴い当機構では、九州観光のハブとして、自治体、経済団体に加え、各地域ＤＭＯ、民間企業とも積極的に連携しながら、マーケティング機能を強化し、地域の稼ぐ力を引き出すことで消費拡大へ繋げ、「観光を九州の基幹産業へ」を目指していく。
（イ）九州オルレにかかわる事業概要
① 九州オルレブランド管理
② 新規コースの認定に関する事務（審査、調整、オープン時 PR）
③ 海外（主に韓国）向け PR（現地商談会、メディア招請等）

（ウ）九州オルレの現状
　九州全県に拡大し、現在は下記の通り２１コースある。
・唐津コース
・武雄コース
・久留米・高良山コース
・宗像・大島コース
・筑豊・香春コース
・八女コース
・みやま・清水山コース
・九重・やまなみコース
・別府コース
・さえき・大入島コース
・奥豊後コース
・高千穂コース
・霧島・妙見コース
・指宿・開聞コース
・出水コース
・天草・松島コース
・天草・維和島コース
・天草・苓北コース
・南島原コース
・嬉野コース
・平戸コース
オ、成果・所感等
（ア）上天草市維和島地区やみやま女山など、これまで観光地と認識されていなかった場所に、多くの韓国人観光客が来ているということだった。本市においても、外国人観光客（特に台湾人）において、人気の出る「新たな観光資源」の開拓ができるかもしれない。
（イ）韓国・済州島の料理店主らが、上天草市大矢野町の維和島を訪れ、同島の主婦らに本場のキムチの漬け方を伝授している事例を聞いた。逆に、試食会では高菜の漬物やたくわんを振る舞われる等、国を超えた民間レベルでの交流もオルレをきっかけに促進されることは素晴らしいと感じた。
（ウ）このような背景には、日韓で２００回以上の報道により、九州ブランドの浸透に貢献している。本市においては、台湾にターゲットを定めて、地道な報道やプロモーションを積み上げる必要があると感じた。

（３）研修視察地　「屋久島町」

ア、調査項目　「屋久島の自然環境を活かした観光振興の取組みについて」

イ、日時　平成３０年７月２６日（木）１６：１５～１７：１５

ウ、会場　屋久島町役場宮之浦支所（鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦１５９３）

エ、内容

（ア）恵まれた観光資源

屋久島町は、九州最高峰の宮之浦岳をはじめとする森林地帯、樹齢千年を超える屋久杉の原生林、大川の滝などの水景観のほか、希少な動植物等が生息する豊かな自然環境や多彩な人文資源など、恵まれた観光資源を有している。このような多様な資源に恵まれた屋久島は、昭和５５年にユネスコパークに登録され、平成５年には世界自然遺産に登録された。我が国において、世界自然遺産とエコパークの２つに登録されている地域は屋久島以外になく、さらに永田浜は平成１７年にラムサール条約にも登録されていることから、世界に誇れる自然と共生した地域となっている。 そのため、観光面からみても屋久島全体が他地域にはない魅力的な観光地となっている。

（イ）観光産業

地域経済の状況からみても、就業者数が第一次、第二次産業で減少する中、観光産業を含む第三次産業は増加傾向にある。こうしたことから、屋久島における観光産業は地域経済に多大な影響を与える産業であると考えられる。

（ウ）観光振興と環境保全

観光需要を優先し過ぎると、自然環境の劣化等が生じる一方、環境保護を優先させれば、基幹産業である観光産業への影響が懸念されることなどから、観光振興と環境保全をバランス良く両立させ、持続可能な観光地づくりを推進していくことが重要であり、そのためには、観光と環境に携わる関係者も含め、住民や観光客との協働態勢を構築することが必要不可欠となっている。

（エ）屋久島町観光基本計画の策定

このようなことから観光産業を地域の総合的戦略産業と位置付けて、観光の推進により第一次産業をはじめ、すべての産業と連携を強化し、本町全体の活性化を図っていくため、住民、事業者、関係機関・団体、行政等が一体となって「屋久島町観光基本計画」を策定した。

オ、成果・所感等

（ア）平成２６年に実施された観光客アンケートによると、女性が５３％であり、２０代が２９％という結果から、夏は若年性が高くなっている。また、９割以上が鹿児島県外であり、関東が４０％と最も高く、旅行における同行者は、友人知人が３６．７％と最も多い。訪問回数は初めてが７６．５％とリピート率が低い。このような結果から、ＳＮＳによる広報に力を入れており、効果が出ているとい

うことだった。本市においても、様々なデータから、ターゲットは明白であり、そのターゲットに観光情報を届けるツールとして、ＬＩＮＥ・フェイスブック・インスタグラム等は効果があると言えるが、未だに導入できていない現状があるため、早期に導入する必要がある。

（４）研修視察地　「屋久島環境文化財団」

ア、調査項目　「屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について」

イ、日時　平成３０年７月２７日（金）９：００～１０：０５

ウ、会場　屋久島環境文化村センター（鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦８２３－１）

エ、内容

（ア）屋久島環境文化村構想とは

国際的にも学術的評価の高い屋久島の自然環境と自然を損なうことなく何千年にもわたって積み重ねられてきた屋久島特有の生活文化（これを環境文化と呼んでいます）を戦略的イメージとして掲げ、学習や研究によってその価値を見直すことを通して、屋久島の自然環境の保全を図るとともに自然と人とが共生する屋久島ならではの個性的な地域づくりの試みである。

（イ）自然環境保全上の課題

・地域産業との調和の問題

・観光客増による過剰利用、ゴミ・水問題

・生活スタイルの都市化に伴うゴミ・水問題

・生活・産業体系の変化による管理 形態の変化

（ウ）産業振興上の課題

・自然保護との調整

・小規模性、隔絶性による競争力不足

・情報不足等による付加価値化の遅れ

・労働力の不足

（エ）観光振興上の課題

・集中型、通過型観光による資源利用の偏り、 不十分な波及効果

・環境客増による季節的オーバーフロー

・関連産業の未成熟による魅力づくり不足

（オ）生活・文化上の課題

・教育・医療等の不安

・都市的魅力の不足

・島内での過疎・集中等による効果的な基盤 整備の遅れ

・伝統的な集落機能の維持が困難
（カ）環境文化村事業の柱
・環境学習・研究施設の整備
・環境形成事業の展開
・ボランタリー協力事業の推進
・新たな地域産業の創出
・国際的交流の展開
オ、成果・所感等
（ア）平成２３年に屋久島里めぐり推進協議会を設立して、里めぐり（散歩コース）を行っている。具体的には、屋久島を訪れる方々に地元の歴史、文化、自然、産業などの集落自慢を地元の語り部のガイドによって案内している。実績では平成２５年度２８２人だったが、平成２９年度には７８７人に増加している。３時間ほど時間に余裕があった際に、集落ごとの地場産業を、参加料が１人１，５００円で体験できることが、利用者数増加の要因と言える。
　一番の目的は屋久杉を見ることだと言う観光客が多い中で、この里めぐりは、現地についてから情報を得るものと考えられるが、早い段階で、観光客へ情報を届けることが課題であると感じた。本市としても、上高地や松本城等を目的に来る観光客が多いが、より松本を楽しんでもらうための情報を、どのタイミングで、どのように届けるのかを、更に研究をする必要があると感じた。

―以 上―

平成３０年８月３１日
　松本市議会議長　上條俊道　様

経済地域委員　今井ゆうすけ